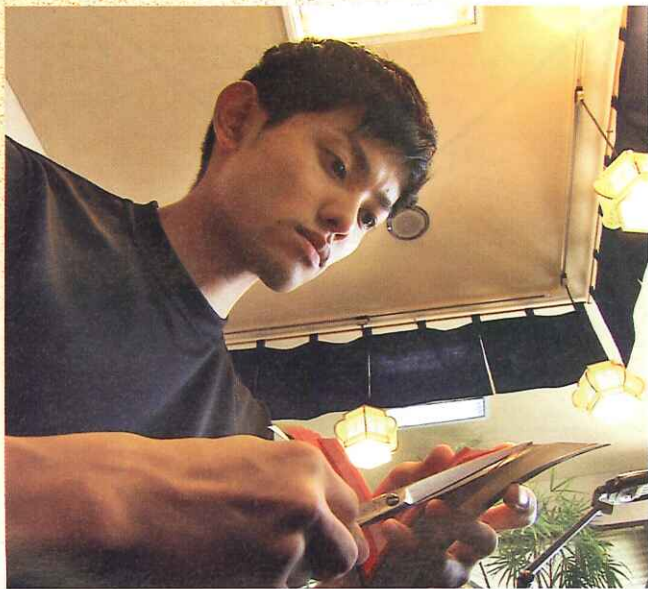


日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Junya Nakamura

1990年熊本県生まれ。中学生の時に灯籠づくりを経験して以来、その魅力に心を惹き付けられ、19歳で灯籠師の徳永正弘氏へ弟子入り。現在、次代を担うために鍛錬の日々を送る。



奉納灯籠

山鹿灯籠(やまがとうろう)

熊本県山鹿市でつくられる国の伝統的工芸品。寺社などを再現した灯籠は主に観賞用で、山鹿灯籠まつりの最後に神社へ奉納されるため奉納灯籠と呼ばれる。祭で踊る女性の頭を飾る金灯籠も、山鹿灯籠の一つ。



金灯籠

山鹿灯籠製作後継者

やまが
中村 潤弥 氏

古代から続く祭の主角を、昔ながらの技でつくる。

熊本県山鹿市で毎年盆に行われ、夏の夜を華麗に彩る山鹿灯籠まつり。1900年の歴史を持つ祭はその名の通り、地元を誇りである二つの山鹿灯籠で人々を魅了する。千人の女性たちが優雅に舞い踊る際、その頭に載せる金灯籠。もう一つは市内各所に飾られ、祭の最後に神社へ奉納される奉納灯籠。

中村潤弥さんは、主に奉納灯籠をつくる灯籠師を目指して日々、努力を続ける若者。中学校の授業での体験を機に灯籠づくりに興味を抱き、19歳でこの世界に飛び込んだ。

やりがいはいは？

中村「師匠は数少ない灯籠師の中でも、昔ながらのやり方を守り続けた方。それを一から学び、身に付けることができるのは本当に有難いことだと思っています」

灯籠と呼ばれながらも、奉納灯籠は照明としての機能を持たない物が多い。形も特異で、城や寺社といった建造物などを模して製作される。一番の魅力は実物を思わせる精巧なつくりにあるが、材料は和紙と糊だけで、木や金属は一切使わない。また、設計図は無く、その替わりとなるのが歩紙。これは実際の建物の寸法を、数十分の一に縮尺して表した物。この歩紙をたよりに切り、折り目を入れた和紙を糊付けして、二つの部材をつくる。

もちろん、全てに正確さが求められる。例えば柱を通す穴は、大きさも位置も全部同じでなければ実物に近づけることはできない。しかし、あえて実物と同じにしないところもある。人は寺社などを見る時に見上げることが多いが、灯籠は上や正面から見ると、そのままの比率で縮小すると背が低すぎて見栄えが悪くなってしまう。そこで見栄えを考え、高さの比率を

部分的に変えて製作する。一人前になるには、10年以上の修業を要するという灯籠づくり。着実に腕を上げているものの、先はまだ長い。

今後の抱負は？

中村「自分にとってのことんやってみて、と思った最初で最後のものです。だから人生の全てを掛けて、この仕事に取り組んでいきたいと思っています」

ふるさとの伝統文化に惚れ込み、その技を極めようと努力する若き職人。人の心を惹き付ける灯籠づくりを夢見て、今日も製作に励む。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2014年9月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MORE!!
ふるさとの伝統の継承に全力で挑む姿を動画で紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE
WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉

検索



TV番組
ディスカバリーチャンネル(CS)

冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!
最新号のご案内 好評公開中

No.072 / 淡路人形浄瑠璃・太夫 竹本 友里希 氏